

<p>研修成果の活用レポート/NITS 大賞エントリーシート</p> <p>※研修成果の活用レポートは、NITS 大賞エントリーシートと同様式です。NITS 大賞に応募される方は、推薦者への提出とは別に、<award@ml.nits.go.jp>宛て、メールにてお送りください。なお、メール送信後、3日以上受領メールが届かない場合はご連絡ください。</p>	<p>※事務局記入欄</p> <p>受理No. : C-28</p>
<p>【学校名・氏名】 愛知県北設楽郡設楽町立田口小学校 ・ 鈴木秀和</p>	<p>【応募部門】</p> <p>3. 地域とともにある学校実践部門</p>
<p>【修了研修名】 平成30年 第3回 中堅教員研修</p>	
<p>【活動名】 地域に開かれた学校づくり ～地域との連携を密にする方策の実践～</p>	
<p>解決すべき課題</p> <p>① 学校の教育活動について、地域への情宣活動の拡充を図る。</p> <p>② 学校応援団（地域のゲストティーチャー）招聘活動を充実させる。</p> <p>③ 学校応援団活動の教育効果をさらに高める。</p>	
<p>目標・方針</p> <p>① について 学校の教育活動を情宣する手立ての運用方法を見直し、より多くの地域の方々や保護者に知ってもらえるように改善する。</p> <p>② について 担任の計画する学習活動と学校応援団（地域のゲストティーチャー）をつなげられるようなコーディネートシステムを構築する。</p> <p>③ について 学習活動における担任の意図や目標（この学習活動で子どもに何を学べるようにしたいのか）を明確にした上で、担任と学校応援団との対話の場を設ける。</p>	
<p>活動内容</p> <p>1 学校の教育活動について、地域への情宣活動の拡充</p> <p>（1）学校ブログの発信担当の明確化</p> <p>これまでは、各担任がブログで発信したい記事がある場合に記事を作成し、教頭の点検を経て公開していた。しかし、担任の業務精選の流れの中で、ブログ作成が負担と感じたり、担任によるブログ更新が定着していなかったりする現状があった。そこで、教頭がブログ更新を担当することにし、各担任の負担軽減に努めた。さらに、各担任が作成する学級通信の記事をデータ保存し、それをもとにブログ作成するという仕組みにすることで、教頭のブログ作成に費やす時間を短縮し、タイムリーにブログを更新することができるようになった。</p> <p>（2）学校短信の全戸配布</p> <p>本校の学区は、愛知県北設楽郡という山間部に位置している。「限界集落」と呼ばれる高齢化が進む地区もある。ブログは、地域を問わず幅広く情報を発信することができるが、本校学区においては、すべての家庭でインターネットを利用しているという状況ではない。そこで、月1回、発行し各家庭に配布している学校短信を、役場を通して区長に配布される「区長便」を利用して、校区の全戸に配布している。</p>	

<p>そうすることで、インターネットを利用していない地域の方々にも、学校の情報を発信できるようになっている。今後は、その感想を受け取ることのできるようなシステムを構築したい。</p> <p>2 学校応援団（ゲストティーチャー）招聘活動の充実</p> <p>本校では、「学校応援団」として、学校の学習活動に地域の方をゲストティーチャーとして招聘してきた。ただ、その依頼は、回覧板で地域に呼びかけた後に、地域の方からの申し出を「待つ」ことが中心で、新規の学校応援団を発掘することに課題が残っていた。そこで、過去の実績を集約した人材データベースを作成し、各担任に配布した。さらに、各担任と学校応援団をつなぐコーディネートする役を教頭が担うようにした。教頭は地域との窓口となる存在であり、地域の人材の情報を集めやすい。このように、担任と地域を結びつけることで、新規の学校応援団とのつながりを生み出すことができた。</p> <p>3 学校応援団活動の教育効果向上</p> <p>地域の人材を学校の教育活動に招聘することは、「社会に開かれた教育課程」の観点から、推進していきたいことである。しかし、招聘することが最終目的となってしまうと、「社会に開かれた教育課程」の実現とは言えない。本校に招聘した「学校応援団」の方に、担任がその授業もしくは学校の教育活動で目的としていることを理解していただくことが重要である。そこで、本年度は前述した「学校応援団」の招聘日が決まると、必ず授業者（学習活動担当）との打ち合わせの機会をもつようにした。そうすることで、「学校応援団」の思いや授業者のねらいを双方向で共通理解し、学習活動をより効果的に展開できるようになった。具体例を挙げると、「絵をかく会（写生会）」で招聘した方には、各担任との打ち合わせにより、各学年の題材とその目的を具体的におさえ、指導後には、この観点に基づいて客観的に評価することができた。このように、「学校応援団」を招聘した学習活動においても、指導と評価が一体となった指導が可能となった。</p>
<p>活動の成果</p> <p>①について ブログの作成・発信過程の改善や学校短信の校区全戸配布により、学校の教育活動について、地域への情宣活動の拡充を図ることができた。</p> <p>②について 学校応援団（地域のゲストティーチャー）をつなげられるようなコーディネートシステムを構築することで、継続招聘に加え、新規の招聘実績も増やすことができた。</p> <p>④ について 担任と「学校応援団」との打ち合わせを位置づけることで、学習活動における目標を具体的に共通理解し、指導と評価の一体化を図ることができた。</p>
<p>アピールポイント（アイデアや工夫）</p> <p>① について 「学級通信」「学校短信」といった、従来の情報発信ツールをより効果的に運用することで、負担を増やすことなく、効果的に情宣活動の充実を図ることができた。</p> <p>② および③について 地域と学校をつなげる取組は、新指導要領で示される「社会に開かれた教育課程」の実現の一モデルといえる。さらには、教育活動の目的を地域の方々と共に共有し、そのために必要な教育課程の創造は「カリキュラムマネジメント」の有機的な実践モデルとなる。また、時数確保が「カリキュラムマネジメント」と短絡的にとらえる一風潮を問い直す視点となると考える。</p>